
ロウきゅーぶたさん

米寿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロウキゅーぶたさん

【Nコード】

N3361Y

【作者名】

米寿

【あらすじ】

幼い頃のケガでバスケットボールをすることを諦めてしまった少年、しばたながれ柴田流。

バスケットを諦めた流は自堕落な生活を送り続け、いつしか『ぶーちゃん』と周りの友達から呼ばれるようになった。

跳べないのではなく、跳ぶことを止めたこぶた。

そんなこぶたはとある少年と少女たちと出会う。

バスケットに一生懸命な人たちに触れた、こぶたは…。

これは、電撃文庫ロウきゅーぶ！の二次創作です。

プロフィール ぼくがこぶたになった日 (前書き)

プロフィール

しばたながれ
柴田流

身長：167cm

体重：88kg

血液型：AB型

愛称：ぶーちゃん

好きなこと：バスケットを見ること

嫌いなこと：バスケットをすること

最近のマイブーム：オンラインのRPGで仲良くなった人とのチャット、コンビニの肉まんの食べ比べ

プロローグ くボクがこぶたになった日

お父さんの仕事がお休みの日に、ボクたちの家族は牧場に遊びに行った。

そこでは牛の乳しぼりを体験できるらしく、お父さんは前から行くのを計画していたらしい。

お姉ちゃんとボクもそれを聞いてすごく楽しみにしていた。

だから、牧場に着くなり早く早くとお父さんとお母さんの腕をとってお姉ちゃんとボクは乳しぼりの体験へと引っ張って行った。

「予約していた柴田ですけど。」

「はい、お待ちしていました。こちらへどうぞ。」

「ねー、お父さん。牛さんは？牛さんは？」

「牛さんどこー？」

「こちらこちら。慌てるんじゃない。いい子にしてお姉さんに着いて行けば、牛さんのところに連れていってくれるからな。」

「「はい。」」

「あらあら。こんな時だけ素直なんだから。」

「それではご案内しますね。」

元気よく返事して係りのお姉さんの後に着いて行くお姉ちゃんとボクを見て、お母さんは笑っていた。

「これが今日牛乳を搾らせてくれる牛さんです。」

「うわあ〜。」

「立派なもんだな。」

「ええ。そうね。」

お姉ちゃんとお父さんは牛のあまりの大きさに思わず声が出てしまっ
た。

お父さんとお母さんも牛の大きさに驚いているみたいだった。

「それじゃあ、お姉ちゃんのほうからやってみましょうか。まず、
私がお手本を見せるのでその通りにやってみてね。」

「はい。」

ボクは先に出来るお姉ちゃんがちょっと羨ましかっただけど我慢
した。

お姉ちゃんはいつもボクに優しくしてくれるし、お父さんやお母
さんに叱られた時も庇ってくれたりしたから、そのお礼だ。

「…とこんな感じですか。大丈夫かな？」

「大丈夫です！」

説明を聞き終わったお姉ちゃんが、牛のお乳のところにはしゃがみ
こむ。

お姉ちゃんのこと考え事をしていたボクは、係りのお姉さんの

説明をよく聞いてなかったから、お姉ちゃんがするのを見て真似すればいいやと思った。

「えつと…親指をお乳の根っこのところに…」

「がんばれよー。」

「言われた通りにやるのよー。」

お父さんとお母さんがお姉ちゃんを応援する。ボクも心の中でお姉ちゃんを応援した。

お姉ちゃんは、それに応えるみたいに勢いよく指を動かした。

「えい！わあ！ホントに出たあ！」

お姉ちゃんは係りのお姉さんに教わった通りのやり方でお乳を搾り出した。

でも、あまりに勢いが強すぎたせいか牛の体が少しビクツとなったのにボクは気が付いた。

それと同時にボクの体は動き出していた。

「えつ！？きゃあ！」

「お姉ちゃん！！！」

牛が体をよじってお姉ちゃんを振り払おうと足を振り上げた。

ボクはお姉ちゃんの体突き飛ばしてそれを庇うように前に出た。そこから先の事はよく覚えていない。凄い衝撃と熱さを右肩に感じてボクは意識を失った。

次に気が付いた時には病院のベッドの上にあった。

ベッドの近くには悲しい顔をしたお父さんとお母さん。泣きながら、ごめんね、ごめんねと謝り続けるお姉ちゃんがいた。

「ボクはどうなったの？」

訳がわからないボクはみんなにそう聞いた。

でも、誰も答えてくれなかった。だからボクはもう一度聞いてみることにした。

「ねえ、ボクはどうなったの？」

「……………ご家族の皆様。ここは私から。」

知らない人の声がするほうに首を傾けると、白衣を着た男の人が立っていた。

きっとこの人はお医者さんなんだろう。

「君はお姉ちゃんを庇って右肩をケガしてしまっただよ。」

そっか。

あの時、ボクは牛が暴れだすのに気が付いて飛び出したんだっけ。

「君のおかげでお姉ちゃんはケガをしなくて済んだんだ。」

良かった。

ボクはお姉ちゃんをちゃんと守れたんだ。

でも、なんでお父さんもお母さんも泣きそうな顔してるの？お姉ちゃんが泣いたままなのはどうしてなの？

「その代わりに、君のケガした右肩はもとにもどらなかつたんだ。」

え？

「手術は成功したけれど、肩の骨を痛めてしまっていて、右手が肩より上にあげられなくなってしまっているんだよ。」

え？え？

「普通に生活する分には特に問題は無いけれど、スポーツを続けていくのは難しいんだ。」

え？え？え？

「……………バスケ……………出来ないの……………？」

混乱するボクが口に出来たのはそれだけだった。

「……………すまない。」

この一言でボクのバスケットボール生活は終わりを告げた。

それは、ボクがミニバスクラブのチームのレギュラーを勝ち取って、最初の大会に臨むちょうど一週間前の出来事だった。

ブログ くボクがこぶたになった日く（後書き）

お疲れ様です。

米寿です。

性懲りもなく新連載を開始しました。色々中途半端なのは重々承知ですが、書きたい、読んでもらいたいと思いついたので始めました。

大変ご迷惑をお掛けしますが応援して頂けると嬉しいです。

scene・1 くまぶたの日常?? (前書き)

プロフィール

しばたかえで
柴田楓

身長：160cm

体重：43kg

血液型：A型

好きなこと：弟とするバスケットボール

嫌いなこと：弟とできないバスケットボール

最近のマイブーム：お母さんみたいなおいしい料理を作るための料理の勉強

scene . 1 　　くぐぶたの日常??

カーテン越しに入ってくる朝日が眩しい。

現在の時刻はAM6:30。後ちよつとしたらにリビングへ降りて行かなきゃいけない時間だ。

「……………眠い。」

昨日学校から帰って来た後、夜ごはんとお風呂に入る以外はゲームをしていて徹夜だ。

新しく発売したRPGでついつい歯止めが効かずにやり過ぎてしまった。

まだまだ、やっていたいけど時間が時間なので仕方がない。

「……………ふう。」

軽く息を吐いて重い体をノロノロと起こす。首を捻るとバキバキと骨の鳴る音がした。

右肩を庇いながらゆっくりと伸びをして固くなった体を解している。

そんな風に行っていると、部屋の扉がノックされ、ボクに声かけられる。

「母さんが朝御飯できたって！」

「……………うん、分かった。」

お姉ちゃんがいつも通りに呼びに来て、それをボクがいつも通りに答える。

トットトットと小気味よく階段を降りていく音がする。その音が聞こえなくなつてから、ボクは静かに扉を開いて部屋の外へ出た。部屋から出ると朝ごはんのいい臭いがする。夜にあれだけお菓子を食べたのにすっかりお腹はペコペコだ。

階段を降りてリビングに着くと、既に朝ごはんがテーブルの上に並んでいた。

「…………おはよう。」

「おはよう!」

眠さ全開のボクの挨拶に元気全開の挨拶でお姉ちゃんが返してきた。

朝一番のこれは、徹夜明けのボクにとってはかなり堪える。

「おはよう。またゲームやったの?」

「…………まあね。」

「ほどほどにね。」

「…………はい。ふあゝああ。」

お母さんとも挨拶し終わったボクは、あくびを隠すこともせずそのまま椅子へと座った。

どっかりと重たい腰を降ろして、眠い目を擦りながら、テーブルの上に置かれている家族写真に挨拶をする。

「…………お父さんもおはよう。」

お父さんは今、別の県へ単身赴任中で今は家に居ない。だから、これで食卓に家族全員が揃った事になる。ボクの家ではよっぽどのが無い限り、皆が揃ってからごはんを食べることになっている。

それを面倒に思うときもあるけど、守らないとお母さんが泣きそうな顔をするから、結局守ってる。

「それじゃあ、いただきます。」

「いただきますー！」

「……………いただきます。あふつ……………」

眠さと戦いながら朝ごはんをもそもそ口へ運ぶ。
んー。うまい。

相変わらずお母さんの料理は絶品だ。
量が少し多すぎるのが珠に傷だけど…。

「ね！流？流ってばー！」

そんなとりとめのないことを考えていると、お姉ちゃんがボクを呼んでいた。

眠い時に考え事をしてたせいで気が付くのが遅れてしまったらしい。

「……………んん。何？」

「今日は一緒に学校行く？」

「お姉ちゃん朝練あるでしょ。ボクはギリギリまで寝てから行くから先に行つてて。」

「そっか……。そうだよね……。何言ってるんだろつ。あはは……。ごめんね?。」

「謝らなくていいよ。ごちそうさま。お母さん、ギリギリになったら起こしてね。」

そう言つてボクは席を立った。

お母さんが何か言いたげにしてたけど、それを無視してボクは自分の部屋へと向かった。

扉を開けて、そのままベッドへと倒れ込む。その衝撃でギシギシとベッドが音を立てた。

「……………はあ。寝よう。」

目を閉じて眠気に身を任せる。徹夜明けのせいか、直ぐに意識が遠くなつていく。

意識が途絶える瞬間、ボクはベッドの側で力無く笑いかけるお姉ちゃんの顔を見た気がした。

s c e n e . i くごぶたの日常?? (後書き)

私事ですが、職場でのストレスからか、白髪と抜け毛がひどい。

本当におじいちゃんへの階段を登り始めました、どうも、米寿です。

お疲れ様です。

少しでも楽しんで頂けたなら嬉しいです。

宜しければ、また、お付き合い下さい。

御一読ありがとうございます。

scene・1 くじぶたの日常(?) (前書き)

プロフィール

柴田朱美 しばたあけみ

身長：162cm

体重：シークレット

血液型：A型

好きなこと：お料理

嫌いなこと：家族が揃わない食卓

最近のマイブーム：娘にお料理を教えること、息子が好きなお菓子作り

scene・1 〈じぶたの日常〉

時間になってお母さんに起こされるままに家を出た。

ボクが通う慧心学園は近くのバス停からスクールバスが出ている。これに遅れると大変なことになるから、いくら眠くても我慢しなきゃいけない。

朝のお姉ちゃんとのことがあって、ボクの足どりはとても重い。出来れば学校を休んで一日中ゲームをしたいぐらいだ。

そんな事を考えながら歩いてようやくバス停に到着すると、ちょうどバスがやってきた。

「…………おはようございます。」

「はい。おはよう。」

運転手さんにあいさつをして、のそのそと席へ向かう。

適当に空いている後ろの席に座ろうかなと思って通り過ぎようとした前の席から声がかげられた。

「おい、柴田。隣空いてるからここ座れよ。」

「……………ああ、竹中くん。おはよう。…んん？竹中くんなんでバスに？」

彼の名前は竹中夏陽^{たけなかなつひ}。慧心学園男子バスケットボール部、通称男バスのキャプテンをしている。

竹中くんとは以前ちよつとした縁があつて、今は友達同士だ。

でも、竹中くんの家は慧心学園の近くで、普段はバスに乗っていないことはないはずなだけだ。

「おう、おはよう。まあ朝からちょっと用があつてな。…つてお前スゲー眠そうじゃなか。どーせまたゲームでもやってたんだろ？」

「朝から大変だね。そして、竹中くんにはお見通しかあ……………ふあゝあ。」

「ったく。そんなことより早く座れよ。バスが発車しまつ。」

「うん。ありがとう。」

せつかく誘ってもらつたんだし、ありがたく座らせてもらおう。ボクは座席に深々と体を預ける。このバスの椅子はふかふかで寝心地がとてみいから、学校に着くまで寝ていよう。竹中くんがいるから着いたらきつと起こしてくれるだろうし。

そんな勝手なことを考えながら目を閉じようとしたボクを見透かす様に、竹中くんが話しかけてきた。

「寝んなよ。色々話あんだから。」

「……………学園に着いてからだと話にくいこと？」

「ああ。まあ…な。」

いつもストリートな竹中くんにしては珍しく歯切れが悪い。ボクを隣の席に呼んだのは、この話をするためだったんだろう。

嫌な予感がするし、眠いけど、聞かないなんて出来る感じじやなさそうだ。

だって、竹中くんの目がすまなそうにボクを見つめているから。

「……………いいよ。それでなんの話？」

「俺たちこの前の地区大会で優勝して、県大会に出ただろ？」

「うん。」

「でも、県大会じゃボロ負けだった。あんな悔しい思いをするのはもうゴメンだ。」

竹中くんはその時の気持ちを思い出したのか、ギリツと奥歯を噛み締めた。

ボクもその場にいたから分かるけど、レベルの違いを見せつけられた、それだけが残る試合だった。

「うん。」

「だから、もっと練習して強くなりたいてって、柴田が休みの時に顧問に相談したんだ。」

バスケットが好きで、負けず嫌いな竹中くんらしい提案だ。

そして、話の流れが読めてきた。なんとなく次の展開を予想できる。

だから、ボクは先に自分の口から言ってしまうことにした。

「それで顧問と美星先生みほしがもめて、収まりがつかなくなったんでしょ？」

美星先生は最近出来た女子バスケットボール部、通称、女バスの顧問の先生。

男バスの顧問とは仲が良くないので、ことあることに衝突を繰り返している。

「そうなんだよ。それで結局、体育館の使用権を賭けて女バスと試合をすることになったんだ。」

「そっか試合か。」

理屈や話し合いじゃなくて、勝負でちゃんと白黒つけるってところが、美星先生らしい。

「女バスが勝てばこれまで通りに体育館の割り当ては週3日ずつ。俺たちが勝てば6日もらえる。」

この条件だけ聞けば、勝っても今まで通りの練習時間を守れるくらいで、女バスにメリットがある様には見えない。

つまり、美星先生がこの勝負を受けた、もしくは受けざるを得なかった理由があるはず。

それが、竹中くんがボクにこの話をするのをためらった理由にもつながっている。

「女バスが負けたら……………廃部だ。」

「そっか。」

「……………ああ。」

女バスは部員が五人しかいない。そしてボクも竹中くんも女バスの部員みんなと同じクラスで顔見知り。そして、経験者一人を除いてみんな初心者だ。

普通に考えれば女バスに勝ち目はなし、このまま廃部になって

しまつだろつ。

竹中くんはこの学園でボクがバスケットしてたのを知っていて、辞めた理由も知ってる数少ない人だ。面倒見が良くて根が優しい竹中くんは、ボクと同じ想いを女バスのみんなにもさせてしまつんじゃないかって思ってる。

でも、二度と悔しい思いをしないためにもっと強くなりたくて、だから迷っている。

竹中くんがボクと出会っていなければ、きっと迷わないでいられたはずだ。

「試合はいつやるの?」

「再来週の日曜日。」

「勝って練習時間が増えるといいね。」

なら、竹中くんの背中を押すのが、今のボクの役目だ。

バスケットをすることを勝手に諦めてしまったボクのために、竹中くんが悩むことなんてない。

「おう!」

ボクがそう言って安心したのか、笑顔で力強く返事を返してくれた。

それを見てボクも安心した。これ以上、ボクが誰かのバスケの重荷になるのは嫌だったから。

「つーか、柴田。他人事みたいにしてるけどお前にも関係あんだからな。お前、男バスのマネージャーなんだぞ?」

「……………そうだったね。」

「そうだったね、じゃねーよ。それになんだよ今の間は？」

「あはは。眠くて少しボーッとしちゃっただけだよ。」

「ならいいけどな。今日も練習あるんだから眠くても来いよ。」

「うん。分かったよ。」

ボクの返事を聞いた竹中くんは満足そうに頷いた。

その顔を見てボクは、とっさに出そうになった、バスケットをやれない人が来てもしようがないという言葉を読み込むしかなかった。

「いろいろ悪かったな。着いたら起こしてやるから寝ろよ。部活に来れなかったら意味ねーし。」

窓の外に顔を向けたまま、竹中くんはボクにそう言った。きつと照れ隠しなんだろうけど、バレバレだ。

でも、せつかくの好意だから甘えさせてもらおうと思う。

「じゃあ、ヨロシク。お休みなさい。」

「ああ。」

眠い中、いろいろ考えたせいか、目を閉じた瞬間に強烈な睡魔に襲われた。

もちろん、ボクは抵抗せずに身を任せて、深い眠りへと落ちていった。

眠りに落ちる直前、三度寝できるなんて贅沢だなーと密かに思っ

た。

scene・i くじぶたの日常? (後書き)

代車の鍵を紛失し、明日は土下座まっしぐらの米寿です。

お疲れ様でした。

御一読ありがとうございます。

プライベートが非常に波乱に満ちていますが、がんばっていますよ
ー私。

ではでは、また宜しくお願い致します。

scene・1 くくぶたの日常くく (前書き)

プロフィール

柴田良秋 しばたよしあき

身長：185cm

体重：78kg

血液型：B型

好きなこと：家族旅行

嫌いなこと：単身赴任

最近のマイブーム：夕食時、家族とのテレビ電話で一緒の食卓を囲むこと

scene・1 くぶたの日常??

三度寝なんて贅沢なことをしても、ボクは眠いままだった。徹夜でのゲームとバスでいろいろ考えごとをしたからか、サツパリ頭が回らない。

そんな訳で、ボクは竹中くんの後をフラフラしながら付いていく。顔を上げてはいるものの、まぶたが重くて視界がぼやけていて定まらない。

おまけに息まであがってきた。正直…キツイ。ボクのクラスまでこんなに遠かったかな。

「おい柴田、そろそろ教室着くぞ。」

竹中くんにそう言われて、首をあげて教室にあるクラスのプレートを確認する。

6-C。間違いない。やっと着いた…。

「はあ…ふう…。かなりの…道のりだったね。」

「…いや。大した距離じゃねーし。」

教室に着いたという達成感を込めたボクの言葉に、竹中くんは呆れた目でつれない返事を返す。

竹中くんにとってはなんでもない距離だろうけど、ボクにとってみれば結構な距離。

校門から教室までなんて、体育の50m走に匹敵するっていうのは言い過ぎだけど、それくらい疲れる。

「…たく。ちょっとは運動しろよ。そんなんだから、あんなあだ

名で呼ばれるんだぜ？」

「ボクはインドア派だよ。それに、あのあだ名は嫌いじゃないから別にいいんだけど。」

「はいはい。んじゃ、さっさと教室入ろーぜ。」

「うん。」

運動した方がいいってことはよく言われる。そしてそのたびにボクはインドア派だと答える。そして、ボクと話をしたり、体型を見てみんなは大体納得してくれる。

君は確かにインドア派だねって。もちろん例外な人もいるけど。

ドアを開ける竹中くんが続いて教室に入ろうとした時、前から大きな声がするのが聞こえた。

「やべー。紗季が怒った！逃げろー！」

「待て！バカ真帆！」

「うおっ!?!」

金色に近い栗色のツインテールを振り乱した女の子が、勢い良く飛び出してきた。

竹中くんは、持ち前の反射神経でそれをなんとか身をよじってかわした。

竹中くんがなんとか、かわしたそれを死角になっていたボクがかわせるはずがない。

ぶつかる瞬間、女の子と目があった。お互い、これから起こること予想がつくけど、もうどうしようもない。

「「あ。」」

そんなマヌケな声をあげて、ボクは女の子の下敷きになって倒れ込んだ。

廊下に後頭部がぶつかって視界がチカチカする。息が止まったみたいで上手く吐き出せない。

このまま、意識を失ってしまえば授業を受けなくていいし、眠れて一石二鳥じゃないか。

よし。そうしよう。では、お休みなさい。

「ぶーちゃん！大丈夫！？ねえ！起きてよっ！」

ボクのどうしようもない考えは、女の子の必死な叫び声にかき消された。

前もどこかで、こんな風に誰かに呼ばれた気がする。

ああ、あの時だ。

起きなきゃ。起きないとずっとお姉ちゃんは泣いたままだから。

後頭部がチリチリしだして痛みが戻ってきた。でも、眠気覚ましにはちょうどいい。

「……………大丈夫。ケガはない、三沢さん？」

「ぶーちゃん！！よかったあ…。」

「柴田っ！大丈夫かつ！？」

目をあけるとクラスメイトでボクにぶつかった三沢真帆みなわまほさんと竹中くんが心配そうな顔で見つめていた。

大丈夫だって言ったのに二人とも心配性だ。後頭部は確かに痛い

けど、ただそれだけ。

「柴田くん。大丈夫？」

声がかけられた方に視界を移すと、眼鏡をかけたおさげのクラス委員長、永塚紗季ながつかさきさんも心配そうにボクを除き込んでいた。

なんだか、騒ぎが大きくなりそうな予感がしたボクは、重たい体を起こすことにした。

それにボクみたいに大きいのがクラスのドアをこれ以上塞いだら、みんなに迷惑がかかってしまう。

「ボクは大丈夫。心配かけてゴメンね、永塚さん。今、起きるよ。といつても三沢さんがどいてくれないと起きられないけどね。ははは……。」

「あ……ゴメン……。」

「いいよ。よっ！ふっ！」

三沢さんにどいてもらい勢いをわざと勢いをつけて起き上がる。

こうでもしないと、三沢さんはいつまでも気にしてしまう。今だって俯いているせいで、トレードマークのツインテールが元気なく垂れ下がっているし。

後はもう一度、ボクが三沢さんになんともないことを伝えればそれで済んじやう話だ。

「……………行こうぜ、柴田。こんなやつのことなんか気にすることねえよ。」

立ち上がったボクの腕を竹中くんが引く。

ボクの腕を掴んだ竹中くんから静かな怒りの気配を感じる。それもかなり怒ってるみたいだ。

ボクは大丈夫だし、三沢さんにもケガがなかったんだからそんなに怒ることないと思うんだけどな。

「んだよ、夏陽！どーゆー意味だよっ！」

「ふん…言葉通りの意味に決まってるだろ。」

売り言葉に買い言葉。前からよく言い合いになることはあったけど、女バスが出来てからは特にそれが目立つようになった。

「竹中くん、そんなにキツく言わなくても…ボクはこの通り大丈夫だったんだし。」

「真帆、落ち着きなさい。」

だからボクは二人の間に割って入った。永塚さんも三沢さんと竹中くんは距離をとらせるために間に入る。

それでも二人は睨みあったまま。二人は前からよく言い合いになったりすることがあったけど、女バスが出来てからは特に多くなっ

た。ここにいる永塚さんも含めて三人は幼なじみだ。竹中くんは、真帆は前から気に入らなかつたって、よく憎まれ口をたたいていたけど、ここまでハッキリ怒るなんてことはなかった。

「気付いてないみてーだから言っとくけど。」

「なんだよ。」

「お前さ、おかしいと思わなかったのか？」

「何をだよ？」

「柴田がお前の下に倒れたことだよ。」

「それは、アタシがすげースピードでぶーちゃんに突っ込んだからだよ？」

「はっ。」

三沢さんの答えを竹中くんが鼻で笑った。そんな簡単なことも分からないのかとバカにした感じた。

それを見た三沢さんがヒートアップ。間にいたボクと永塚さんを押し退けて竹中くんへと詰め寄る。

「言いたいことがあるなら、ハッキリ言えよ夏陽！」

「ちよつと真帆！落ち着きなさいって！夏陽もなんで挑発するわけ？」

三沢さんを止めに入って、竹中くんへを諫めようとした永塚さんを、竹中くんは無視して言葉を続けた。

「柴田はな、お前を庇って自分から後ろに倒れたんだぞ。」

「え？」

「いくらいきなりお前が突っ込んできたからって、柴田とお前じや体格が違いすぎる。普通にぶつかれば、お前が吹っ飛ばされるに

決まってるだろ？それじゃ、お前がケガするかもしれないから、柴田は自分から後ろに倒れたんだ。そんなことも分かんねーのかよ？」

竹中くんはそう一気にまくし立てた。

詰め寄っていた三沢さんから勢いが消え、頼りなげな瞳がボクに向けられる。その瞳は、ボクに本当なの？と言外に問いかけている。正直に言うべきか、ボクは迷った。そもそもこうなるのが嫌だったから、何度も大丈夫だよって言ったんだ。けど、竹中くんはそれを見過ごしてはくれなかった。…うーん。どうしよう？

「おはよー。って、入り口に集まってどうした？」

ボクが三沢さんになんて声をかけていいか迷っていると、担任のたかむらみほし 箕美星先生が教室へと入ってきた。

なんてタイミングの悪さだ。箕先生は基本的にいい人なんだけど、関わりと何かと事態が面倒な方向にいつてしまうことをボクは去年から知っていた。そして、この法則に例外はないということも。

「ちょうど良かった。柴田が真帆とぶつかって頭打ったから、保健室に連れて行ってやってくれよ。」

「ホントか？柴田、大丈夫か？」

「いや。ボクは大丈夫…。」

「いいから行って来い。」

ボクの見方は竹中くんに遮られてしまった。

やっぱりこうなっちゃったか。三沢さんのことは気がかりだけど、しょうがない。

いまさら、この流れに逆らえると思えないし、おとなしく言うことを聞いておこう。

「分かった。詳しい話は柴田と、後で真帆と竹中にも聞く。それじゃ、行くよ。」

「はい。」

「そうだ、紗季。」

「なんですか？」

「私はホームルーム遅れるから、ヨロシクな。」

「分かりました。」

そんなやり取りを終えて、ボクは笹先生と一緒に教室を後にした。教室から出ていく時、何か言いたそうな三沢さんの顔が見えたけど、ボクはおとなしく保健室に付いていくしかなかった。

scene・1 くじぶたの日常? (後書き)

職場で自分の歓迎会が開かれることになったと言っていたら、実は自分プロデューズだったという畏に愕然とた米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

今回の話、真帆好きの方いらっしゃいましたらすいません。

因みに私も真帆派なので書いていて辛かったです。そんなことは聞いてないですか…ですよね。

では、またまた。

S e n c e . 1 ～じぶたの日常～（前書き）

ガールズ・トーク（休み時間）

【智花】 真帆、元気ないね。どうしたの？

【真帆】 うーん。朝からちょっとマズイことやっちゃったんだよね…。

【愛梨】 それって、もしかして柴田くんが保健室に行ってるのに関係あるのかな？

【紗季】 そうよ。朝、真帆が柴田くんとぶつかっちゃってね。一歩間違えば真帆がケガしたかもしれないんだけど、柴田くんが庇ってくれたおかげでケガせずに済んだのよ。

【ひなた】 おー。ぶーはイイ人。

【紗季】 そうね。でも、真帆がその時にちゃんと謝まらなかったせいで、夏陽が怒っちゃって…。

【智花】 そんなことがあったんだ…。

【真帆】 そうなんだよ。それにちゃんとお礼もしてないしさ。ぶーちゃん、みーたんに保健室にすぐ連れて行かれちゃたし…。

【愛梨】 それなら、皆で真帆ちゃんを助けてくれてありがとうって言いに行くのはどう、かな？

【ひなた】おー。あいいり、ナイスアイデア。ついでにぶーの好きな給食もお届けする。

【紗季】そうね。いい考えだと思うわ。

【真帆】給食持って行けばぶーちゃん喜ぶだろうし、謝りに行けて一石二鳥だ！早速みーたんに聞いてこよう！

【紗季】ちょっと！真帆待ちなさい！…って、行っちゃったわ。

【智花】あはは…。

【紗季】でも、柴田くんには本当に感謝してるわ。もし、真帆がケガしたら、今度の試合出られなくなってたから。

【愛梨】そうだね。柴田くん男バスのマネージャーさんなのに助けてくれたんだもんね。

【ひなた】おー。ぶーはいつも優しい。ひなの苦手なもの食べてくれたことある。

【智花】それは何か違う気がするけど…。それじゃあ、真帆が戻って来たら皆で保健室に行こう。

【三人】おー！

Sence・1 くじぶたの日常〜

今、ボクは保健室のベッドにいる。

朝のことを篁先生に説明して、保健室の羽田野先生はたのに診てもらって特に問題なかったので、とりあえず安静にということになり、ベッドで寝ることになった。

ボクがもともと朝から眠かったのもあって、意識は一瞬で落ちた。目が覚めたのはついさっきで、理由はお腹が空いたからだ。

体を起こして、保健室の時計を確認する。既に時間はお昼休みが半分ぐらいなっていて、朝から随分時間が経ってしまっている。どおりでお腹が空くわけだ。

そこでボクは重大なことに気がついた。それは、この時間にボクの分の給食が残っているのかということだ。慧心学園の給食はなかなかおいしい。それを逃すなんてことは絶対避けたい！

よし！そうと決まれば早速行動開始だ。膳は急げもとい、善は急げ。

「羽田野先生。もう大丈夫そうなので、教室に戻ります。」

先生に声をかけたのだが反応がない。ベッドの前のカーテンを開けるとそこには誰もいない。

なぜいけない！勝手に出ていくわけにもいかないし、これじゃあ給食が食べられない！…終わりだ…もう何もかもが…終わりだ。

「ははっ…ははは…。はあ…寝よう。」

ノロノロとした重い足どりでベッドまで戻り、中に入り直す。

こうなったら、部活の時間になるまで具合が悪いことにして寝てしまおう。給食という学園での楽しみを奪われたんだから、それく

らいしてもバチは当たらないはずだよね？食べ物への怨みは怖いって言葉もあるくらいだし。

ベッドの前のカーテンを閉め、1日に五度寝という快挙？を成し遂げようとするボクを、扉をコンコンとノックする音が阻止した。

「失礼します。」

「失礼します。」

「おー。しつれいします。」

保健室に声が響く。その声にはボクは聞き覚えがあった。そして、誰が来たのかをだいたい予想できた。

「ぶーちゃん、起きてる？」

「うん、起きてるよ。」

この遠慮がちにかけられる声は三沢さんのだ。

寝たまま出迎えるわけにもいかないの、ボクは体をベッドから起こしてから返事を返した。

「カーテン開けるわよ？」

「うん。」

このハキハキした感じの声は永塚さんのだ。

ボクの返事を待ってからゆっくりとカーテンが開けられる。

開けられたカーテンの先には五人のクラスメイトが立っていた。

そこにいたのは、ボクの予想を裏切らず、慧心学園女バスのメンバーだった。

「ぶーちゃん！ホントにごめんなさい！」

ボクの姿を見るなり、いきなり三沢さんが謝ってきた。

突然の謝罪に驚いたボクは、呆気にとられてすぐに返事をするこ
とができなかった。

「あたしからぶつかって、ぶーちゃんにケガさせたのにちゃんと謝れなくて…あー！うまく言えないんだけど、ごめんなさい！」

三沢さんは頭を下げながら、また謝る。

わざわざそれを言うために来てくれたんだ。やっぱりあの時、一言声をかけておけばよかった。そしたら、余計な心配をかけずにすんだのに。

でも、それはもう過ぎたことだ。折角謝りに来てくれたんだから、キツチリ謝罪の気持ちを受け取ってこの件は終わりにしよう。

「わざわざ謝りに来てくれて、ありがとう。三沢さんも謝ってくれたから、この話はこれでおしまいしよう？」

「うん！ありがとう、ぶーちゃん！」

向日葵みたいな元気な笑顔で三沢さんが頷いた。

いやいや、なんとか一件落着。

でも、そうすると気になることがある。ただ謝りに来るなら三沢さんだけでよかったのに、女バスのメンバーが全員で来たのはなん
でだろう？

「ぶー、まだ、あたまたいたいの？」

ボクを『ぶー』と呼んだのは、袴田はかまだひなたさん。

ボクが頭の中で自問自答している顔を見て、痛みに顔をしかめたと
思っただらう。

袴田さんは、ふわふわした髪を、ふわふわさせて、ふわふわと近づいて来て、ボクの顔を覗きこんだ。

「ううん。もう大丈夫。」

「おー。それならよかった。」

いけない、いけない。自分でこの話はおしまいって言うっておきながら、心配をかけたら本末転倒だ。

それに、なんで皆が来たのかだって、考えるんじゃなく、直接聞いてしまえば済む。

「皆が来てくれたのは嬉しいんだけど、どうして皆で来たの？」

「えつと、ね。美星先生と羽田野先生にし、柴田くんがお腹すかしてるから、保健室に給食を持って行ってって、た、頼まれたから…それと…。」

「ほ、ホント!？」

「ひゃうー!」

給食という単語に自分を抑えられず、香椎さんがいいかけた言葉を遮って、つい大きな声が出てしまう。

保健室に給食を持ってきていいのかとか、色々ツッコミ所はある

けど、ありがたく頂くとしよう。

でも、その前に驚かせてしまったことを謝らなきゃいけない。

「ごめんね、突然大きな声出して。」

「ううん。ちょっとビックリしちゃっただけだから…。」

ボクの謝罪に、俯きながらも、ちゃんと応えてくれたのは、香椎^{かしい}愛莉^{あいり}さん。ボクも背は高い方だけど、香椎さんはそれよりも少し高い。

でも、本人はそのことをとても気にしていて、今も大きな体を小さく小さく縮こませている。

「トモ。柴田くんは我慢の限界みたいだから、早く給食を渡してあげましょ。」

「あ、うん。でも、ベッドに持っていくと汚しちゃうかもしれないから、こっちの机に置くな。」

永塚さんにトモと呼ばれたのは、湊^{みなととせか}智花さん。

女バスで唯一のバスケット経験者。普段はとても大人しそうな雰囲気をしているけど、バスケの時はまるで正反対の空気を纏う。

始めてそれを見た時、本当に驚いたのを今でもボクは覚えている。それぐらい湊さんの変わり身は凄かった。

「ありがとう、湊さん。」

「うん、どういたしまして。」

ボクはベッドを抜けて待ち焦がれた給食のもとへ向かう。

ここから給食が置かれた机までの距離さえもどかしい。それぐら

い、ボクのお腹は空腹を訴えていた。

辿り着いたボクを迎えてくれたのは、サンドイッチとホワイトシチューにサラダ。どれもとてもおいしそうだ。

「いただきます。」

聞きたいこともあるけど、空腹をこれ以上我慢できそうにない。

そんなに時間もかからないから、ちょっと待っててもらおうしよう。ボクは挨拶をして、皆がいるのに構わずもの凄い勢いで給食を食べ始めた。サンドイッチもシチューもサラダもみるみる内になくなっていく。

そんなボクの様子を五人は驚いた顔で見つめていた。

「ふう…ごちそうさまでした。」

サラダの上に乗っていたミニトマトを口に放り込んで飲み込み、食後の挨拶で締める。

おいしかった。お腹もいっぱいになったし、さつき香椎さんが言いそびれてたことを聞いてしまおう。

「給食持ってきてくれてありがとう。それで、香椎さつきはなんて…って、みんなどうしたの？」

「！」「どうしたのじゃないよっ！ぶーちゃん食べるの早すぎだからっ！」

「そうかな？」

「柴田くん。自覚無いのね。」

勢いよく捲し立てる三沢さんとヤレヤレと肩を竦める永塚さん。
お腹が空いてる時、ボクはいつもこの調子だし、竹中くんも特に何も言わなかったから変だと思っていなかったけど、どうやら違うらしい。

二人だけじゃなくて他の三人も、ウンウンと頷いているのがその証拠だ。これからはもう少しゆっくり食べることにしよう。

「ボクの食べ方はこの際いいとして、さっき香椎さんは、ボクになんて言おうとしたの？」

「えつとね。私たち柴田くんにお礼がしたくて来たんだよ。」

「お礼？」

「うん。朝のこと聞いたよ。真帆をかばってありがとう。」

聞き返すボクに、香椎さんの後を引き継いで、湊さんが答えた。

「今度、男バスと試合があるのは柴田くんも知ってるよね？」

「うん。」

「私たちは五人しかいないから、誰か一人でもケガしたら試合が出来なくなっちゃうところだったの。柴田くんは男バスのマネージャーなのに、真帆を助けてくれた。だから、皆でお礼を言いに来たの。本当にありがとう！」

「……ありがとう!」「」「」

そういつて女バスの皆は頭を下げた。

頭を下げられたボクは困ってしまった。体が勝手に動いただけで、たまたまそれが三沢さんを庇うという結果につながっただけ。

でも、女バスの皆からしてみれば、ボクが三沢さんを庇った結果、ケガをせずに済んだわけだから、感謝しているし、お礼を言いたい。そうだった。自分のしたことが相手にどう思われるかなんて、結局のところ受け取り方次第なんだって、そんな当たり前のことをボクは忘れていた。

いや、忘れていたかっただけだ。ボクとお姉ちゃんは、それで変わってしまったから。

ダメだ。この思考の流れはマズイ。こんなことを考えても何もいいことなんてないし、皆とお姉ちゃんを重ねるなんてやっちゃいけないことだ。

「どういたしまして。わざわざ、ありがとう。もう授業始まるよ？ボクは後で行くから皆は先に教室に戻って。」

だからボクは、思考の流れを絶ちきり、皆に素直にお礼を言って保健室から遠回しに帰る様に誘導した。

ボクがそんなことを知っているなんてことを知らない皆は、頭を上げて笑顔でボクを見た。

「じゃー後でね、ぶーちゃん！」

「柴田くんも遅れないようにね。」

「おー。ぶー。あとでね。」

「えへへ。それじゃ、失礼します。」

「それじゃあ、教室でね。柴田くん。」

そして、女バスメンバーの皆がそれぞれに挨拶をして保健室を出て行く。

全員が出て行ったのを確認して、ボクは深く息を吐いた。

「……………なんか、疲れたなあ。」

録に授業も受けてない上に保健室でさっきまで寝ていたはずなのに、思わずそう呟いてしまった。朝のお姉ちゃんとのやり取りや、竹中くんの相談に三沢さんのこと。まるで、停滞しているボクを急かすように、何かの歯車が回り始めたように感じる。もちろん考えすぎなのかもしれないけど、あまりにタイミングがいい。

きつと今日の部活でも何かありそうだ。なら、少しでも休んだほうがいい。

「はあ…先生が戻って来るまで、もう一眠りしよ。」

そう勝手に結論付けて、半ばヤケクソ気味に、ボクはさっき阻止された一日に五度寝の自身最高記録へ挑むことにした。

いつもは至福を感じるベッドの中でも、ボクのモヤモヤした気持ちには晴れそうになかった。

S e n c e ・ i じぶたの日常? (後書き)

自分の歓迎会なのに絡み酒のバイトに捕まり、あげく逆ギレされた米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

お酒の力恐るべし。

飲んでも吞まれない様に気を付けなきゃいけないと思わせてくれるいい教訓になりました。

そんな米寿はスーパーの駐車場で爆睡。危うく仕事に遅刻しそうになりました。

皆様もくれぐれもご注意を。

s e n c e . i ~ ~ じぶたの日常 ~ ~ (前書き)

プロフィール

てんどうおさむ
天童治

身長：185cm

体重：77kg

血液型：AB型

好きなこと：なんでも楽しんでやること

嫌いなこと：つまらないこと

最近のマイブーム：公園に来る子どもにバスケの稽古をつける

s e n c e . 1 〈じぶたの日常〉

「小笠原先生が盲腸で入院する。」

「小笠原先生が盲腸で入院する？」

放課後、男バスの活動へ顔を出したボクは、竹中くんいきなりそう言われて、思わずオウム返ししてしまった。

「ああ。柴田は保健室に直行だったし、なかなか戻って来ねーから話すタイミングが今になっちまったんだよ。」

確かにボクは女バスの皆が出ていった後、羽田野先生が来るまで寝ていたからしょうがない。

小笠原先生の盲腸だって病気なわけで、これもしょうがないことだ。

「女バスとの試合はどうなるのかな？」

小笠原先生は男バスの顧問で監督だ。それが不在なら、試合は延期になるのが普通だ。

でも、ボクはあえて竹中くんに試合がどうなるのかを聞いた。

なぜなら、アノ美星先生が関わっていて、普通の流れになるなんてことはありえないだろうから。

「変更は無しだ。このままやる。」

やっぱり。

そうなるんじゃないかと思ったんだ。

ボクが保健室で感じてた嫌な予感はずしかったみたいだ。当たって欲しいとは、これっぽっちも思わなかったけど。

「でも、監督不在で試合なんてよくオツケーが出たね。」

「なんでも、美星がねじ伏せたらしい。…それにアイツ、それぐらいのハンデがあっても楽勝だろ？なんて言いやがった！だから受けてやったんだよ。」

「そつか…。」

声をあげた竹中くんがボクに捲し立てる。

竹中くんを挑発してまで試合をさせたかったのか。…なんか美星先生らしく無い気がするな。

美星先生は強引な所はあるけど、こんな風に不必要に相手を煽ったりしないと思う。

女バスにしてみれば、これは大きなチャンスだから、逃す理由はないっていうのは分かる。けど、腑に落ちない。なんでそこまでするんだろ？

うーん。上手く言葉にできないけど、なんか、こっ、モヤモヤする。

「監督がいるとかいないとか、この際もう関係ねえ。俺は…俺たちは、もう負けるなんてゴメンだ。そうだろ、柴田？」

そうボクに言った竹中くんの顔は、すごく真剣だ。きつと、県大会のことを思い出したんだろう。いつも以上に、言葉に力がこもっている。

ならボクもそれにキチンと向き合わなければいけないと思う。胸のモヤモヤは晴れないけど、今は忘れることにしよう。

「うん。そうだね。」

ボクの返事に竹中くんが頷いて応える。

小笠原先生の入院にはビックリしたけど、竹中くん達、男バスのすることは変わらない。試合に勝って、練習日をもらって、たくさん練習して、次の大会で悔しさを晴らすだけ。

女バスの皆がどうなるのか気にならないと言ったら嘘になるけど、それはボクにはどうしようもないことだ。

「美星のせいですっかり忘れてたけど、女バスとの試合で思い出したことがある。」

「何を？」

「そっぴや真帆のヤツが俺らに勝つために、すげえコーチを呼んだって言うってたんだよ。あまりにも自信満々だったから、ちよつと気になってたんだ。」

「凄いいコーチか…。どんな人が知ってる？」

「分かんねえ。俺も見たことはないからな。でも、ちよつと前から来てるらしい。」

「うーん…。」

ボクは腕組みをして竹中くんに言われた凄いいコーチのことを考えてみることにした。

どんな人が分からないから確かなことは言えないけど、こんな短期間でほぼ初心者ของทีมを勝たせることは、普通は無理だと思う。

しかも、練習は男バスと半々。時間も場所も限られてるんだから余計に難しい。

竹中くんだって、それは分かっているはず。でも、それをボクに言うてきたってことは不安なんだろう。

いきなり監督がいなくなつて、その状態で試合しなくちゃいけないことを考えれば当然だ。

なら、ボクが竹中くんの不安を少しでも軽くしてあげないといけない。一応、ボクは男バスのマネージャーなんだし。

「それなら、今度の女バスの練習の時に会ってみるのはどうかな？そうすればどんな人が分かるし。」

「……………そうだな。万が一ってこともあるし、柴田の言う通り、どんなヤツが分かった方がこつちもやりやすくなる。」

ボクの提案に少し迷った風だったけど、竹中くんは同意してくれた。よかった。上手く背中を押せたみたいだ。

ボクはホツと胸を撫で下ろした。

「決まりだね。それじゃあ、どうやってそのコーチに会おうか？」

「俺に考えがある。上手くいけば真帆達のコーチを辞めさせられるかもしれないしな。」

竹中くんはニヤリと笑った。

あまりいい予感はないけど、ここで水を差してもしょうがないから、竹中くんにお任せしよう。

「分かった。詳しくは後で。それに、そろそろ練習始めないと。皆待つてるよ、竹中キャプテン？」

アップを済ませた男バスのメンバーが、竹中くとボクの様子を伺っているのに気付いたボクは、わざと明るい調子で言った。

「あ、ああ。言われなくても分かってるよ！皆集合ー！」

竹中くんは、照れ隠しに頭をかきながら、いつもより大きな声で皆へと集合の合図をかけた。

これで、竹中くんの固さが少しでもとれてくれればいい。竹中くんは気付いてなかったかもしれないけど、ボクと話している時、ずっと表情が固かったから。

「よし！それじゃ、ワンツーからのレイアップいくぞー！」

指示を出し終えた竹中くと皆がコートに散っていく。

あの表情を見るに、どうやら竹中くんは丈夫そうだ。ボクはひと安心して体育館の床に腰を下ろした。

「さっすが、ぶーちゃん。タケの扱いがうまいな。」

そのタイミングを見計らっていた様に、男バスレギュラーの1人である、和久井^{わくい}くんが声をかけてきた。

「そんなことないって。」

「いやいや。タケのやつお前が来るまでなんか近寄りづらくてさ。正直助かったよ。」

「竹中くん不器用だもんね。」

きつと竹中くんは、小笠原先生のことか、女バスとの試合のことなんかを考えていて、周りのことなんて見えてなかっただろう。その様子があまりにも簡単に想像出来てしまい、ボクは思わず心の中で笑ってしまった。

「まあなー。でも、そこがタケのいいところでもあるんだよなー。」

「だね。」

和久井くんのいう通りだと思う。

ボクもそんな竹中くんだからこそ、男バスのマネージャーをやることにしたわけだし。

「にしても、タケは気にしすぎなんだよな。女バスにしろ、そのコートにしろ、普通に考えれば、どうせたいしたことはできやしないってのに。」

「おい！和久井！サボンな！」

ボクが答える前に、竹中くんの声がコートに響きわたった。

「やべーんじゃ行くわ。」

「頑張つてね。」

呼ばれた和久井くんは、急いでコートへと戻っていく。

見送ったボクは、和久井くんが言っていたことがひかかっていた。

「……………普通に考えれば、かあ。」

ボクはその言葉に昔のことを思い出し、思わず独り言を漏らして
しまった。

s e n c e . i ~ ~ じぶたの日常?? (後書き)

ロウきゅーぶ!のゲームを買って、ロリコンじゃないと主張しても誰も信じてくれない現実に打ちひしがれた、米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

このゲームのせいで執筆が停滞してしまいました。

資料にと思って買ったのに、とんだ誤算だよ!

……………すいません。ただの言い訳です。

ではでは。

s e n c e ・ 2 〱 じぶたとコーチ？〱 (前書き)

ファミリー・トーク〱約二年前〱

【朱美】 あら、流。また公園に練習に行くの？

【流】 うん。再来週にレギュラーを決める試合があるから、それまでにちよつとでも上手になりたいんだ。

【朱美】 あらあら。張り切ってるわね。

【流】 うん！

【朱美】 でも、それならお姉ちゃんも誘って二人で練習したら？一人より二人の方が色々できそうじゃない？

【流】 …ううん。お姉ちゃんは誘わない。

【朱美】 あら、どうして？

【流】 今回の試合まで上手くなって、レギュラーになってビックリさせたいんだ。それに、…お姉ちゃん優しすぎて練習にならなくなっちゃうんだよ。

【朱美】 そうなの。じゃあ、お母さん、流が練習してるのお姉ちゃんにはナイショにしておくわね。

【流】 ありがとう！お母さん。じゃあ行ってきます！

【朱美】 行ってらっしゃい。夕御飯までには戻ってきてね。

【流】 わかったー。

【朱美】 楓、流はもう行ったわよ。隠れてないで出てらっしゃい。

【楓】 ……………。

【朱美】 ねえ、楓？

【楓】 ……………。何？お母さん。

【朱美】 流が言ってたお姉ちゃんは優しすぎて練習にならないって
いうのは本当？

【楓】 ……………。うん。本当だよ。流は、本当はバスケ上手いんだよ。
私なんかよりずっとずっと。皆気付いてないだけなんだよ。

【朱美】 そう。楓がそういうなら間違いないわね。

【楓】 !お母さんは私の言うこと信じてくれるの？皆信じてくれるの？
いのこ？

【朱美】 当たり前じゃない。いつも流を見てくれてる楓が言うんですもの。
間違いなんてあるわけじゃないじゃない。

【楓】 うん！ありがとう！お母さん！

【朱美】 どういたしまして、それじゃあ流の為に美味しいご飯を用意しなきゃね。

【楓】私も手伝う！

【朱美】あらあら、はりきっちゃって。じゃあ、お願いしちゃおうかしら？

【楓】うん！任せて！

あれは、ボクが公園のバスケットコートで練習している時だった。

つまらなそうにバスケットしてんなあ、お前。

不意にかけられた声。

振り向いた先に、男の人が立っていた。詳しい年はわからないけど、大学生ぐらいだろう。

知らない人だ。それになんだかバカにされた気がする。ボクは真剣にバスケットをしているんだから、面白いとかつまらないとかは関係ない。

お父さんとお母さんにも知らない人の言うことは聞きちゃいけないって言われてるし、聞かなかったことにしよう。

ボクは大学生？くらいの男の人を無視して、ボールを拾い直し、ゴールに向かってドリブルを始めた。

つておい！無視かよっ！？

練習も再開したボクの前に、叫びながら男の人が飛び出してきた。ボクはボールをついたまま仕方なくドリブルするのを止めた。練習はしたいけど、この人が邪魔でできそうにない。

なんか面倒な人からまれちゃったな、とボクは思った。

ふう……。やっと止まったか。そして、お前。今、なんか面倒な人に絡まれちゃったな、とか思ったろ？

その言葉に、ボク表情が強ばる。時間に見れば、ほんの一瞬。よっぽど注意して見ていなければ、気が付かないだろう。

でも、男の人は、ボクのその一瞬を見逃さなかったみたいだ。

やっぱな。はあ…傷付くわ。俺はこんなにも子どもに優しい、善良な一般市民だっていうのに。

男の人は、大げさな身ぶりでガツクリと肩を落とした。その姿は、芝居がかっていて、とても胡散臭い。

けど、これ以上無視しても、きつと同じことの繰り返しになりそうなのがするし、さっきこの人に言われたことが気になっていた。だからボクは、男の人に話しかけることにした。

ボクはバスケをつまらないなんて思ったことはないです。

おっ？

ボクから話しかけたのが意外だったのか男の人は少し驚いた声をあげて、大げさに驚いた顔をした。

その顔がボクをバカにしている様に見えて、さらに言葉を続けた。それに初めてあった人に、どうしてボクがつまらないそうにバスケやってるなんて分かるんですか？

なんだよ。ちゃんとか喋れんじゃねーか。俺は天童治^{てんどうぢぢ}。お前は？

柴田流です…って何でいきなり自己紹介してるんですか！？

いや。だってお前、知らない人とは喋っちゃいけない、なんてこと考えてそうだろ？だから自己紹介してみたわけよ。これで俺とお前はめでたく知り合いだ。

そう言っつて、天童とかいう人は二カツと笑った。

それを見たボクは、内心で大きな溜め息をついた。

こんな変な人と知り合いになるなんて、めでたいなんてこれっぽちも思えない。

後、ボクはこの人の、人を見透かす様な言い方が好きになれなかった。まるで、ボクのことなら何でもお見通しだと言われてるみたいだから。

それで、天童さん。

あー、天童さんなんて固い呼び方すんなよ。オサムンでいいつて。俺と流の仲じゃないか。

……………それで、天童さん。

つれないねえ。

ボクは天童さんの提案を無視して語気を強めた。

「冗談にしても面白くないし、早く話を終わらせて練習の続きがしたかった。」

再来週、ボクが所属しているミニバスのチームで、レギュラーの座をかけた紅白戦が行われる。

そこでレギュラーを勝ち取るため、ボクは練習をしていたんだ。それを邪魔された。ボクは一生懸命練習していたっていうのに！

なんで、ボクがつまらなそうにバスケしてるって思ったんですかっ！？

ボクの声が二人だけのコートに響き渡る。

今まで、ボクは人にこんな大声を出したことは無かったから、その声の大きさに自分で驚いていた。
けど、天童さんは驚いていなかった。それどころか、ウンウンと頷きながら笑っていた。それも凄く楽しそうに。

じゃあさ。

そう言った瞬間に天童さんの姿がボクの視界から消え、ボクの手からボールも消えていた。

どうやって目の前から消えた？

いつステールされた？

突然の事態に混乱するボクの後ろからボールをつく音と声があった。

なんで流がつまんなそうだと思ったか、教えてやるよ。

振り向いた先には、ドリブルを止めて、ボールを人差し指で回しながら、不敵に笑う天童さんが立っていた。

s e n c e . 2 ～ごぶたとコーチ??～（後書き）

ロウきゅーぶがこのライトノベルがすごい！28位にランクイン！

おめでとございます！

さらに、女性キャラクターランキングにもっかんこと湊智花が14位にランクイン！

おめでとございます！

私生活のネタが尽きたので、原作を誉めちぎることにした、米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

個人的には真帆が入っていないのが不服です。

すみません。調子に乗りました。

ロウきゅーぶ！はタイトルや偏見臆せず、もっと色んな人に読んで貰えたらいいなと思います。

ではでは。

s e n c e ・ 2 ～こぶたとコーチ??～ (前書き)

ファミリー・トーク(約二年前)

【良秋】ただいま。

【朱美】あら、お父さん、お帰りなさい。

【楓】あ！お父さん。お帰り。

【良秋】ただいま、お母さん、楓。

【朱美】今日は早かったのね。

【良秋】ああ。たまたま、早く仕事が片付いてね。ついていたよ。それより、流は？

【楓】流は練習に行ってるよ。

【朱美】でも、いつもならもう帰って来てもいい頃なんだけど…。

【良秋】流は頑張り屋さんだからな。きっと、練習に夢中になっているんだろう。それに、夕飯には戻って来るように言っているんだろう？

【朱美】ええ。でも、せつかくお父さんが早く帰ってきたんだから、ゆっくり夕食を食べたいじゃない？楓もお手伝いしてくれたしね。

【良秋】へえ。偉いじゃないか、楓。それは楽しみだ。

【楓】ありがとう、お父さん。でも、私ももう六年生だから、お料理ぐらいできるよ。

【良秋】そうか。これは失礼しました。

【朱美】うふふ。楓ったら、流が練習頑張ってるから美味しいものを作ってあげたかったんですって。

【楓】ちょっと！お母さんっ！？それは、内緒だって言ったじゃないっ！

【朱美】あらあら。そうだったかしら？

【良秋】なんだ、お父さんの為じゃなかったのか。残念…。

【楓】もうっ！お父さんまで！もう、知らないっ！

【良秋】ごめんごめん。それじゃあ、流が帰ってくるまでゆっくりしているとうつかな。

【朱美】そうね。お父さんの帰りも早かったし、楓も手伝ってくれて、本当に今日はいい日だわ。

s e n c e . 2 〈こぶたとコーチ?〉

はあっ…はあっ…はあっ…。

荒い息を吐きながら、ボクはコートに大の字に倒れていた。疲れ
て、もう指一本動かす気力も残っていない。

ボクがつまらなそうにバスケットをやっていることを教えてやると言
われ、天童さんから挑まれた1on1。

結果はボクの惨敗だった。確かに、天童さんとボクでは年齢も体
格も違うのだから、この結果は当たり前だ。

というより、天童さんもおとなげない。なにせ小学生相手に本気
でぶつかってきたんだから。

はあっ…はあっ…はあっ…ははっ…あはははっ!!

それがたまらなく可笑しくて、ボクは倒れたまま、息が切れてい
るのも構わずに声をあげて笑った。

ボクが今できる全力でバスケットをしたのに全然相手に届かない。

確かに負けたのは悔しいけど、それ以上にワクワクした。バスケット
をやってて、こんな気持ちになったのは、初めてバスケットをやった時
以来だ。

お! やつと笑ったな。なんだよ、やりや出来るじゃんか。

バスケット…こんなに…楽しかった…んですね…。

だろ?

天童さんは俺の言った通りだろ? という顔で、ニカッとボクに笑

った。

最初は胡散臭いと思っていた天童さんの笑顔が、今のボクにはまるで違ったものに見える。

それは、天童さんが本気で笑っているのが分かったらだと思う。お互いが本気でぶつかり合った今だから、言えることだけだ。

天童さん…バスケ…上手いんですね…。けど…子ども相手に…本気だすなんて…恥ずかしく…ないん…ですか…？

でも、素直に天童さんを認めるのが恥ずかしかったボクは、照れ隠しに皮肉を混ぜた。

だって、あれだけ胡散臭い人だとか思っていたのに、バスケで勝負したとたんに手のひらを返すなんて。

息があがって、まともに頭も回らないけど、その意地だけは通さない、なんか…カッコ悪いじゃないか。

はっ。本気の勝負に年とか性別とか関係あるのか？大人げない？いいね。大いに結構だ。そんなハンデありの勝負なんて、自分も相手も楽しめるわけなんてねえだろ？俺は楽しくないことは嫌いなんだよ。

ぶっ。ふふっ。はははっ！あっはははっ！！

なんて滅茶苦茶な人なんだろう。でも、天童さんの言葉はボクの耳にとても心地よく響いた。

本気の勝負に年とか性別とか関係なんてないし、ハンデをもらって勝っても楽しくもなるともない。

本当にその通りだ。それに、ボクはそれを知っていたじゃないか。でも、忘れようとした。

お姉ちゃんと最後にバスケをしたあの日。ボクが『翔んだ』あの

日のお姉ちゃんの顔がどうしても頭から離れなくて。

それからだ。ボクが本気を出すことをしなくなったのは。普通じゃないボクが普通に混じってやっていくには、そうするしかなかったから。

んだよ。笑うところじゃないぞ、流。

ふう……。すみません。それに、ありがとうございます。本当に楽しかったです。天童さんのバスケ。

だから、天童さんと勝負してスッキリした。

そして、天童さんの言葉で、ずっとボクの心を縛っていた鎖が解けた気がした。

今なら、ボクはあの時みたいに『翔べる』かもしれない。

礼はいらねーよ。俺だって楽しかった……。って言いたいところだが、まだ終わりじゃねえだろ？最後に一本。『今』のお前の全力でな。

寝転んでいるボクの所へ、天童さんからボールが転がってくる。

ボールはボクの右手の所でちょうど止まった。座っていた天童さんが立ち上がり、ゴールに背を向けて、悠然と構える。

来いよ。

口の端を吊り上げて、天童さんが笑う。

……まったく、この人には一体どこまでお見通しだっというんだろ
う。

ふう…。

ボクは立ち上がり深呼吸をひとつした。でも、ちっとも落ち着かない。

心臓がいつもよりかなり早いスピードで脈打っているのが、自分でも分かる。

怖い？

そうかもしれない。

でも、それよりもボクは本気で天童さんと勝負してみたい。

そして、天童さんの想像を超えてやるんだ。

へえ…いい顔するじゃねえか。俺にそっくりだぜ。

心外です。ボクは天童さんみたいに胡散臭くないですよつと。

拾い上げたボールを天童さんへと放る。

言うじゃねえか。それじゃあ、口だけじゃないってことを見してくれよつと。

放ったボールがボクへと返ってくる。

それを受け取った瞬間、ボクは一気に加速し、天童さんの右側に、斜めに深く沈み込む。

そのまま、ゴールへ向けて一直線にドライヴを仕掛ける。

おいおいおい！さっきまでとはまるで別人じゃねえかっ！だが、行かせねえ！

一瞬反応が遅れた天童さんだが、すぐにボクに追い付く。

並走する二人。両者は互いに譲らず、ゴールへの距離が縮まらない。

い。

そして、ゴールへ向かう者と、それを阻む者が再び交錯する。

あれで抜ければ楽だったのになあ。

それじゃあ、意味ねえだろ？見せてくれよ。

短いやりとり。でも、ボクたちにはそれで充分だった。

ボクは一瞬視線をゴールへ向けた。その瞬間を狙って天童さんの手がボールを襲う。

その手がボールを捕える瞬間、ボクはボールごと体を一回転させて、天童さんの左側に躍り出ようとする。

バックロールターン。前の１on１でスティールを狙ったボクを天童さんが鮮やかに交わしたテクニック。

さっきのお返しか！だがよ、まただ！

驚異的な反応で天童さんが追いつがってくる。

でも、そんなことは関係無い。ボクの足元には、ミニバスでは使えないスリーポイントのラインが見えている。それだけで、もう、充分。

っ！！！

そして、ターンの勢いを殺さぬまま踏み切り、ボクは空へと『翔んだ』。

ボクとに続くように、天童さんも跳んだ。

空中で相対する二人。

ボクより大きな天童さんの体が、壁となってゴールを覆い隠している。

でも、その壁が徐々に下がりはじめ。そして、ついに、ボクの視界がリングを捉えた。

これで！

終わりだ！

ボクの声と共に左手からシュートが放たれようとしたその時、天童さんの声とその左手が、リングを塞いだ。

ボクの勝ちです！

ボクは空中でシュートのモーションに入っていた左手から右手へとボールを持ちかえて、天童さんの右側へと体を流す。

ボクの視界を遮るものは、これで無くなった。
だから、右手から放たれたシュートを遮るものは、もう何もない。

ダブルクラッチかよ……。へへっ。ははっ。流！お前のバスケット、最高じゃんかっ！

リングを通り抜ける乾いたボールの音がする。

今、天童さんがどんな顔してるか、ボクには分からない。
けど、きつとその顔を見ても、ボクはあの時みたいにならない気がした。

だって、天童さんの笑い声が本当に楽しそうだったから。

s e n c e . 2 ～こぶたとコーチ??～（後書き）

給料日までの日を残り、5000円くらいで過ごさなきゃならない。まだ後、2週間以上ある。絶対に負けられない戦いがそこにはある、という状態の米寿です。

お疲れ様です。

御一読ありがとうございます。

携帯料金の払い忘れて携帯が止められるという自爆を起こしながらも、なんとか頑張っております。

皆さんも、携帯料金の払い忘れにはくれぐれもご注意下さい。かなり、焦りますので。しかし、本当の恐怖は払い終わった後の自分の残金の少なさだった!!

お金のご利用は計画的に…。

ではでは。

s e n c e ・ 2 　くじぶたとコーチ？（前書き）

天童治コーチのお悩み相談教室

【流】　ねえ、天童さん。

【治】　なんだ、流。

【流】　ボク、お姉ちゃんがいるんですけど、ケンカしちゃったんです。

【治】　ケンカね。んで、原因は？

【流】　バスケです。お姉ちゃんはボクより先に、バスケを始めてて、スゴく上手いんです。

【治】　そうなのか。それで？

【流】　ボクが今日の天童さんの時みたいに本気を出してお姉ちゃんに初めて勝ったんです。その時のお姉ちゃんの目がまるで怖いものを見るみたいだったんです。

【治】　そっか……。

【流】　そんな目で見られるのが、ボクも怖くなってきて、思わずお姉ちゃんに言っちゃったんです。

【治】　なんて言ったんだ？

【流】もう、お姉ちゃんとはバスケしても楽しくないから、バスケはしないって…。

【治】……………はあ。なんでお前のバスケがつまらなそうだったのか分かった。原因は二つあったってことか。

【流】天童さん？

【治】いや、こっちの話だ。そんなことより、さっき流が言ったことはヒデーな。自分でも分かってんだろ？

【流】……………はい。

【治】なら、どうするか分かってるよな？それに、そんな気持ちのままバスケしたって、きっと楽しくもなんともねえだろ？

【流】お姉ちゃんに…ちゃんと謝まる。

【治】そうだ。

【流】…分かりました。でもボクにできるでしょうか？

【治】流。

【流】何ですか。

【治】お前だけじゃなくて、姉さんにもバスケを楽しませてやれ。

【流】っ！はい。

【治】よし！謝って、明日姉さんも一緒に連れて来い！俺もおもし
れえ奴連れてきてやるからよっ！

s e n c e . 2 くじぶたとコーチ??

家から、美味しそうなご飯の匂いがする。この玄関を開ければ、お母さんの作った美味しいご飯が待ってる。いつもよりたくさん練習してきたから、ボクのお腹はもうペコペコだ。

でも、玄関のノブに手をかけたボクは玄関を開けられずにいた。見るとノブにかけたボクの手が震えていた。

ふう…。

家に帰るのにこんなに緊張するなんて考えたこともなかった。天童さんと約束したこと。お姉ちゃんに謝ること。また、一緒にバスケットをしようって言うこと。

優しいお姉ちゃんは、きっと許してくれる。それに、私こそごめんねって言うてくれる。そして、また一緒にバスケットしようって笑ってくれる。

そうなるって分かっているけど、どうしても考えてしまう。お姉ちゃんが許してくれなかったら、どうしようって…。

はあ…。

だから、踏ん切りがつかずにため息ばかりが漏れてしまう。

このままだといつまで経っても家に入れない。それが分かっているのに、ボクの手は一向に動いてくれない。

今日はもう、ずっとこのままでもいいかな。

そんな後ろ向きで意味の無い考えが頭を支配しようとしたその時、ボクの意味とは関係無く、玄関のノブにかけられた手が動いた。

え？

お！？

呆氣にとられたボクと、びっくりしたお父さんの声が重なった。

なんだ、流。今帰ってきたのか？

…うん。

玄関の前で二十分くらい迷ってたと正直に言うわけにもいかず、ボクはそう答えた。

お父さんの手には煙草と携帯灰皿があって、外に一服しに来たんだろう。家は室内禁煙とお母さんが決めている。

流。

何？

折角だから一緒に戻ろう。だから、お父さんの一服に付き合ってくれないか？

うん。いいよ。

ボクはお父さんの提案に二つ返事で頷いた。断る理由なんてなかった。むしろ、お父さんと一緒に家に戻るっていう理由ができて、ほっとしたぐらいだ。

ボクとお父さんは縁側に移動してそこに腰を降ろした。

お父さんは煙草に火をつけて煙を吸い込む。そして、吸い込んだ煙を暗くなってきた空へと気持ち良さそうに吐き出した。

お父さん、タバコ好きだよな。

まあな。それにコイツとの付き合いも長いからな。

お父さんは長年連れ添った相棒の様に煙草を眺めながらそう言った。

そんなお父さんを見て、ボクはふと疑問に思ったことを聞いてみることにした。

ねえ、お父さん。お母さんとタバコどっちが好き？

どっちもだな。

お父さんは即答した。

そうじゃなくて、どっちか選んでよ。

その答えにボクは納得できなくて、さらに食い下がった。そんなボクを見て、お父さんは少し困った顔をしながら、逆にボクに質問してきた。

なら、流はお姉ちゃんとバスケットボールどっちが好きだ？

今度はボクが困る番だった。だって、その答えはお父さんと一緒に、どっちか選べと言われても選べない。

きっと今、ボクの顔はさっきのお父さんと同じで少し困った顔になっているだろう。

…どっちも好き。

だから、ボクのお父さんからの質問に対する答えも決まっていた。お父さんはボクの答えに満足そうに笑って、短くなった煙草を最後に一吸いして、灰皿で揉み消した。

そして、吐き出された煙が空に溶けて消えた。それを合図にお父さんは縁側から腰を上げた。

今日の御飯、お姉ちゃんが流の為に一生懸命手伝ったってお母さんが言ってたぞ。

うん。

お姉ちゃんは、流が好きだから頑張ったんだ。だったら、早く戻ってあげなきゃ駄目だぞ。流だってお姉ちゃんが好きなんだろ？

お父さんはそう言って、ちょっと煙草臭くなった手をボクの頭にポンと載せた。

どうやら、お父さんにはお見通しだったみたいだ。もしかしたら、どこからかボクが家の前で立ち往生しているのを見ていたのかもしれない。

うん！

返事と同時にボクも立ち上がる。

よし！じゃあ戻るか。お母さんも、もう待ちくたびれてるかもしれない。

お父さんはボクの頭に載せていた手で、今度は背中をポンと押し、先に行くように促した。ボクは、それに逆らわず、玄関へと足

を踏み出した。

そして、ボクの手が玄関のノブにかけられる。ボクはノブを捻る前に、くるりとお父さんの方に振り向いた。

ねえ、お父さん？

ん？どうした？

ボク、もうお腹ペコペコだよっ！今日のごはんはなんだろうね？

それは、入ってからの楽しみだ。

うん！楽しみ！

ボクは玄関へ向き直ってドアのノブを回し、家の中に飛び込んだ。あれだけ悩んでいたのが嘘の様に、ボクの体は軽かった。

家の中は御飯のおいしそうな匂いと、暖かさに包まれていた。

ただいまー！！

おーい。流が帰ってきたぞー。

ボク達の声に、リビングの扉が開く。そして、中からお姉ちゃんが出てきた。

それを見たボクは靴を揃えるのも忘れて、お姉ちゃんに向けて駆け出していた。

おかえり…って、えっ!？

駆け出したボクを見て驚くお姉ちゃんに構わず、その勢いのまま、ボクはお姉ちゃんの胸へと飛び込んだ。

お姉ちゃんは少しよろめいたけど、しっかりボクを受け止めてくれた。

ただいま、楓お姉ちゃん。それから、ボクのためにお料理のお手伝いしてくれてありがとう！

流、どうして知って……って、お父さん！！！

あっはっはっ。すまんすまん。内緒だったっけ？

もっっ！！

しらはつくくれるお父さんに、お姉ちゃんが頬を膨らませた。そんな賑やかな騒ぎが起こっている廊下に、お母さんもやって来た。そして、お姉ちゃんの胸に飛び込んだままのボクを見て、微笑んだ。

あらあら。楓も流も仲良しさんね。

うん！ボク楓お姉ちゃんのこと好きだもん！

あうあう言いながら真っ赤になるお姉ちゃんを見て、お母さんは嬉しそうに笑った。

ふふふ。良かったわね、楓？

もっ、お母さんまでっ！

あたたかい空気が廊下を満たした。言うなら今しかないと思う。ボクは思った。

楓お姉ちゃん。

どうしたの、流？

お姉ちゃんのキレイな黒い瞳がボクを映す。

大丈夫。今のボクならお姉ちゃんにちゃんとと言える。もう、迷ったりしない。

お姉ちゃんとバスケットしても楽しくないから、もう一緒にバスケットしないなんて言っただけだね。また、ボクとバスケットしてくれる？

お姉ちゃんの瞳が驚きに大きく見開かれる。そして、恐る恐る、ボクに聞く。

…いいの？

お姉ちゃんの顔は泣きそうだった。それを見て、ボクは自分がどれだけお姉ちゃんにヒドイことを言ったのか気付いた。

胸がキュッと締め付けられる感じがした。

うん！明日一緒に公園に行く？スゴくバスケットが上手い人が来るんだ。お姉ちゃんにも会ってもらいたいんだ。

うん！ありがとう、流。スゴく楽しみ！

お姉ちゃんはそう言って、ボクをギュッと抱きしめた。

違うよ、お姉ちゃん。お礼を言うのはボクの方なんだ。許してく

ねて、
ありがとう。

s e n c e ・ 2 〳〳ぶたとコーチ？〳〳（後書き）

明日がようやく給料日、只今、財布の残金24円、乗り切った！乗り切ってやったぞ！それにしても、全く肉を摂取できないキツイと気付いた、米寿です。

御一読ありがとうございます。

明日は肉を食います。いや、よく見たらもう日付が変わっている…だと。

やっほーい。でも、時間が時間だから金は振り込まれていない。

ふう…。お見苦しいところをお見せして申し訳ございませんでした。

ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3361y/>

ロウきゅーぶたさん

2011年12月9日01時05分発行